



連携事業をやって、みた

「織物 BAR in FUCHU」ができるまで

東京都・区市町村連携事業は、都内の区市町村が抱える課題や地域の状況に応じた文化事業を、東京都、アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)が連携して、実施するものです。府中市では2024年度に「共生社会を聞いて、みる」、2025年度に「共生社会にふれて、みる」を地域のNPOである特定非営利活動法人アーティスト・コレクティブ・フチュウ(ACF)と協働し、実施しました。「織物 BAR in FUCHU」は2年目に実施したものです。

市の担当は、この2年間のことを次のように振り返ります。

市の仕事をしていると、協働という言葉がよく使われます。

市民の方々と一緒にまちの課題に取り組むことだとは分かりつつも、いつも協働するって、どういうことなのだろう?と考えるてきました。

連携事業をはじめたとき、正直に言えば、最初は戸惑いがありました。でも、ほんとうに協働するって、こういうことなんだなと思いました。

「織物 BAR in FUCHU」に至るまでには、何度も会議を重ね、現場を共に動かしながら、試行錯誤を重ねてきた道のりがありました。ここでは、その一端をみなさんにお伝えします。



連携事業をやって、みた

「織物 BAR in FUCHU」ができるまで

すごろくで!

府中市は市長を筆頭に「共生社会」の実現に力を入れており、芸術文化を通して共生社会にどう取り組めるのかが今回のテーマになりました。ここでは、2年間にわたる連携事業の取り組みをまとめています。会議の議論はなかなか結論が出ず、遠回りしたことが何度もありました。様々な方々との出会いから新たな発見や驚きがあり、それらを活かすことで事業を進めてきました。一步一步ゆっくりとした歩みでも少しずつ前に進んできたこの2年間の道のりを、すごろくで表現しました。

東京都・府中市芸術文化連携事業は、市の課題意識をもとに予算負担は都、アーツカウンシル東京 (ACT) は事業全体のコーディネートを担当。また、当初から地域の事情に精通したアーティスト・コレクティブ・フチュウ (ACF) も事業の企画運営に参加し、4者の連携で実施しました。



2024年

- 4月** 連携事業の関係者で初打合せ
「共生社会」と「デフリンピック」2つのキーワードが浮かび上がる
- 8月** 地域の実情に詳しい協働相手が加わるが、目的はまだみえない
ちょっと迷走...
- 9月** 「誰もが」共生社会の対象になってしまうが、「誰かに」を絞らないと事業が具体化しない
いきなりピンチ

START!

- 10月** まずは、聞いてみる
共生社会を知るために、実践者の声を「ラジオ形式のインタビュー」で聞いてみることに!
- 事業タイトルと番組名が「共生社会を聞いてみる」に決定
- ゲストの検討
候補が次々と見つかり、市内の多様な実践者が見えてくる
- 高田裕美さんの著書『奇跡のフォント』を読んで号泣! ゲストに決定
高田裕美さん フォントデザイナー
- より多くの人に届く形へ
聞こえない人にも伝わるよう、ラジオから映像へと方針転換
- 見える工夫の導入
誰にでも伝わるよう、話の内容をリアルタイムで「見える形」にする手法を取り入れる
- ブラインドサッカー日本代表監督が府中にいる!? 知人を通じてオファーが実現! ゲストに決定
中川英治さん ブラインドサッカー日本代表監督

2025年

- 1月** 手話との出会い
通訳と共に収録にのぞみ、戸惑いもありつつ、工夫をしながら和やかなやり取りの時間に!
- もっと聞いて、みる
次に話を聞く人として、ろう者へ出演依頼。通訳を介したやり取りに挑戦、対話の難しさを実感
小野寺敬雄さん 府中市聴覚障害者協会会長
- 2月** 市長を表敬訪問
「市民文化の日 in けやき並木」で公開収録。3名の多彩なゲストから、共生社会への思いを聞く
府中市 高野律雄市長
- 3月** 誰にでも届く映像を目指し、全会話をテロップ化することに。作業時間が倍増!
映像公開開始!
- 4月** 自由な感性で絵を描いてきた息子の将人さんが、収録会場で絵画制作を行う
府中在住作家の母が出演
障害がある息子が泣き叫ぶ日々の中、絵を描く時間だけ落ち着くことに気づき、その表現を育ててきた話を聞く
柴田まりさん アール・ブリュット 立川実行委員
- 5月** 聞こえる人/聞こえない人が一緒にできる作業とは?
2年目のテーマは「聞く」から「やる」へ、ダンス・料理・映像制作などが候補に挙がる
- 6月** 市の担当が「織物 BAR」をこっそり見学、これを府中でやろうと決心!
2年目の事業タイトル決定。漢字と平仮名で意見が分かれる
「織物 BAR in FUCHU」
- 7月** 小野寺さんと街で遭遇し、覚えていた手話で挨拶!
市で「織物 BAR」をこっそり見学、これを府中でやろうと決心!
久村さんと初打合せ、参加者同士の交流を大切にする「織物 BAR」への思いを聞く
- 8月** みんなで「織物 BAR」を体験、運営のための気づきがたくさんあった
ろう者に伝わる工夫の視点
手話通訳との打合せで、ろう者にはテキストが苦手な人もいと知る
- 9月** 一緒に「やる」って、どうのこと?
参加者が「店主」になるアイデアが生まれ「店主募集」の準備を始める
総出で織物の素材となる布を裂き、手づくりの織機を製作
- 10月** 「織物 BAR in FUCHU」開催!
準備を重ねたことで運営側にも余裕が生まれ、飛び入りの店主役も現れて大盛況!
- 11月** 「織物 BAR in FUCHU」開催!
準備を重ねたことで運営側にも余裕が生まれ、飛び入りの店主役も現れて大盛況!
- 12月** 「手話劇祭」招致や「インクルーシブ運動会」など、共生社会への具体的な取り組みを聞く。ゲストに決定
府中市 高野律雄市長

2026年

- 1月** 「すごろく」で記録してみよう! これまでの出来事を全員で書き出す
記録のまとめ方に行き詰まる
- 「連携事業をやって、みた「織物 BAR in FUCHU」ができるまで」完成! 連携事業の経験を活かして、次の協働へ!
- マスの形や原稿を議論しながら、急ピッチで編集!

STAY TUNED...



9月4日6日

1回!

「織物 BAR in FUCHU」開催!
聞こえる・聞こえないにかかわらず多くの人が訪れ、織物を通じて交流できる場が生まれる

— 織物BARとは？



美術家・彫刻家の久村卓が主宰するワークショップ。カウンターで好きな毛糸や布をオーダーし、手のひらサイズの織物をつくる。手作業をすることで、周りを見たり、話をしたり、様々なコミュニケーションが誘発される場が生まれる。府中では市内で不要になった素材を集め、創造活動に活用する「ラッコルタ-創造素材ラボ-」と連携し、閉業した洋裁教室や現役のアパレルブランドから提供された布を使った。



久村卓(美術家・彫刻家)

東京生まれ。多摩美術大学彫刻学科卒業。ハンドメイドやDIYなど、美術で周縁とされる素材や技法を選び、“台座的”なものをつくることで、ようやく制度的に成立する作品を制作する。国内外での展覧会多数。近年はワークショップやコレクティブでの活動も行う。



東京都・府中市芸術文化連携事業

主催：東京都、府中市、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京
企画協力：特定非営利活動法人アーティスト・コレクティブ・フチュウ

東京文化戦略 2030 の「誰もが芸術文化に身近に触れられる環境を整え、人々の幸せに寄与する～人々のウェルビーイングの実現に貢献する」ため、生活の中での芸術文化活動が増えること、行政の様々な場面で芸術文化の活用を目指し、東京都が公益財団法人東京都歴史文化財団と共に、区市町村単独では取り組めない試行的な取り組みの支援を行っている。

連携事業をやって、みた

「織物 BAR in FUCHU」ができるまで
2026年3月発行

編集：大川直志、佐藤李青(アーツカウンシル東京)

ロゴデザイン：杉浦一志

冊子デザイン・写真：高橋真美

材料提供：ラッコルタ-創造素材ラボ-より | 布：サトー洋裁教室、(株)F.F.P. | ダンボール板：多摩岡産業(株)

グラフィックレコーディング：清水淳子

発行：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京



連携事業の詳細はこちらをご覧ください



ARTS COUNCIL TOKYO

